

壺まつり実行委員会（山口県防府市）

～「地場産業」から「観せる窯元」へ～ 地域に根付いた「壺まつり」

壺まつり実行委員会
会長
田中 洋三



1. 防府市の概要

■豊かな自然に恵まれた「千年のまち」

防府市は山口県南部に位置し、海・山・川の豊かな自然に恵まれた、瀬戸内海に面する人口 12 万人の都市で、江戸期には、赤穂に次ぐ生産高を誇った塩業で栄え、現在は自動車関連企業が立地する工業都市として発展を続けております。

防府は古い歴史を持った都市でもあり、市名の由来（「周防の国府」）が示すとおり、千年以上も前から周防国の中心としてまちづくりが行われてきました。

■風情ある神社仏閣や貴重な文化財が魅力

この千年のまち防府には、日本で最初に建立されたと言われている防府天満宮をはじめ、東大寺別院阿弥陀寺や周防国分寺などの古刹（こさつ）があり、貴重な文化財も鑑賞できます。

■古くから焼物の里であった末田堀越地区

また、防府は良質の陶土に恵まれていたこともあり、古い焼物の歴史があります。末田地区でも古墳時代後半からの窯跡が数多く発見されています。また、堀越地区では周防国分寺の補修用瓦を焼いた登り窯の跡が見つかっています。

天明 8 年（1788）には、古い伝統を持つ佐野焼の陶工、内田善左衛門が堀越の地に新窯を設け、堀越焼が発祥しました。その後隣接する末田地区に末田焼がおこりました。



瀬戸内海を望む末田地区

■明治から昭和初期にかけての地場産業

末田焼は明治 8 年から土管の製造を始め、排水用土管の一大生産地となりました。ピーク時には、製造戸数は 11 戸、従業員 250 余人におよび、その販路は中国・九州地方一円、それに四国の北部にまで広がっていきました。

一方堀越焼は、明治になって窯元が増え、地域ぐるみで焼物に従事するようになりました。ここでは、「水かめ」「便壺」「すり鉢」など生活雑器が主で中国・四国・九州・近畿・北陸の各地へ流通していました。

当時は地域の暮らしが焼物と共にあり、正に地域を代表する地場産業でした。最盛期には毎日どこかの窯焚の煙が立ち上がっていました。



地域の活気を象徴していた窯の煙

しかしながら、戦後の産業技術の革新により、地場産業は次第に衰退してゆきます。末田土管は昭和 35 年を境に下降の一途をたどり、また堀越焼は金物製品の普及などにより昭和 40 年中ごろには、わずか二軒を残すのみとなりました。

2. 活動開始の背景・経緯

■窯の火を守るため立ち上がる

時代の流れとともに窯元が次第に減ってゆき、地域の窯の火が消えかかっていた両地区でしたが、末田焼・堀越焼の伝統を受け継ぎながらも、新しい陶器づくりを目差して活動する窯元が七軒残っていました。

これらの窯元はそれぞれが個展や陶器展を開くなどして末田焼・堀越焼の良さを発信していましたが、昭和 50 年代には若手を中心となって窯元が結集し、新しい陶器づくりの発信の場として、そして窯業の里の

復興に立ち上がります。



地域の賑わいを取り戻すため 立ち上がった窯元たち

窯元の有志は、この地区にある、堀越三神社で毎年春と秋に行われていた例祭を思い出します。当時は職人の慰労や、地域の方への感謝の意味を込めて、食事の振る舞いや演劇の上演など、大変賑やかなお祭りを行っていました。この例祭にちなんで、陶器市を開催することを企画します。これが毎年春秋 2 回行われる「壺まつり」の始まりです。

■記念すべき「第一回壺まつり」

第一回目の壺まつりは昭和 56 年秋に開催し、3 千人の人出でにぎわいました。

初回の壺まつりでは、お客様の利便を考え、各窯元の作品を一箇所に持ち寄って行いましたが、お客様から「窯元にも行ってみたい」という要望を聞き、壺まつり会場を末田・堀越地区全体に変更してゆきました。窯元めぐりを楽しみながら直接窯元で作品に触れていただく現在のスタイルが出来上がりました。地域全体にお客様が訪れることで、地域に往時の賑わいが戻ってきたようでした。



地域の賑わいがよみがえる

3. 活動の発展

■「焼物の里」を発信するために

こうしてスタートした「春秋 2 回の壺まつり」ですが、発展のために

様々な工夫を実践してきました。

まず私たちが注目したのが、ここ末田・堀越地区が「焼物の里」であるとお客様に知っていただくことです。

そこで地元の小学生を対象としてスケッチ大会を開催、優秀作品を案内状の絵はがきに採用しました。

この絵はがきは大変反響があり、多くの方に「焼物の里」を印象付けることができました。



小学生のスケッチを絵はがきに採用

また、この企画をしばらくの間続けたことで、地元の小学生の目に窯元の風景を焼きつけることができ、今は大人になった当時の卒業生が今度は自分の子供達に「焼物の里」を伝えてくれています。

■お客様へのおもてなし

壺まつりの企画も回数を重ねる毎に様々なアイデアが出されました。大陶器市として規模を拡大するために、市内外から知り合いの窯元に声を掛け、協賛出品をしてもらったところ輪が広がり、今では全国から窯元が出品してくれるようになりました。



全国から若い陶芸家の姿も

陶器の展示販売の他にも、地域をあげてお客様をおもてなししています。以前は餅つきをして陶器職人たちへ振舞っていましたが、今では壺まつりへ来られるお客様に振る舞い、大変喜ばれています。



振る舞いの餅つきが復活

また、ゆっくりと窯元めぐりを楽

しんでいただきたいことから、平成13年には、JR 防府駅からの無料バスによる送迎サービスを開始し、平成19年には広い会場をジャンボタクシーで周遊する「ぐるりんバス」のサービスを開始しました。これまでお客様は両手に重い荷物を持って会場内を移動されていましたが、この「ぐるりんバス」によって買い回りがより便利になったと好評を得ています。

手探りによる工夫の積み上げの結果、本年春に開催した第58回目の壺まつりでは、3万人が来場されました。

4. 地域づくりの意義と効果

■自慢の「焼物の里」を目差して

壺まつりを通して、創作活動の発信の場を得るとともに、多くの方に「焼物の里」を知ってもらうことができました。

これは、毎回壺まつりに来場されるお客様と、壺まつりを支えている方々のお陰と感謝しています。

その感謝の印として、平成9年に幹線道路にあるバス停に窯をモチーフにした停留所を寄贈しました。耐火レンガづくりの茶色いこのバス停は今では地域のシンボルマークになっています。



地域のシンボル「窯のバス停」

■「マイたこつぽ」づくりと出前授業

最近では、年2回の壺まつり以外でもお客様が来られるようになりました。

ここ末田・堀越地区には「たこつぽ」を製造している窯元があります。その窯元では現在、観光客に楽しんでもらおうと、半成型ずみのたこつぽにアレンジを加える「マイたこつぽ」体験を行っています。

字を彫ったり、模様を付けたりしていくうちに、素朴なたこつぽが、素敵なインテリアに変わっていきます。

また、毎年地元の小学校に対して、出前授業や陶器づくり体験の受入れも行っています。



観光客に人気の「マイたこつぽ」体験

5. 課題と展望

■後継者問題が課題

壺まつりは今秋で第59回を迎えました。振り返ってみると30年近く壺まつりを続けることができましたが、当時からのメンバーは皆60才近くになり、窯元の後継者問題が課題です。

ある窯元では、「苦しいときがあったが、まつりの運営は忙しく楽しい。壺まつりが無かったら今日まで窯業を続けていたかわからない。」という声も聞くように、創作活動の発信の場である壺まつりが、活動のエネルギー源であるように思います。お客様の喜ぶ顔を思い浮かべながら創作活動ができることは大きな財産であり、若い作家を受入れ、後世にこの財産を引き継いでいくことは今後の使命であると思っています。

■夢の陶芸村

私たちは一年を通じてお客様に「観」ていただく焼物の里にしたいという夢を持ち続けています。

近年では、シニア世代の生きがい作りが各地で活発になっていますが、そうした元気なシニア世代を対象とした、陶芸村の設立を夢見ています。

創作活動の感動を共に味わっていただける方にこの地域で、共に陶器づくりの暮らしを味わっていただくことができれば、将来にわたって末田・堀越の窯焚の煙は絶えることなく続いていくことでしょう。

この壮大な夢の実現にはまだまだ時間がかかりますが、来春には壺まつりは記念すべき第60回目を迎えます。長年積み上げてきた発信の場を通じて、多くのお客様と感動を共有できる壺まつりとなるよう、そしてこの地域の宝を発信し続けられるよう今後も頑張っていきます。